お年寄りの生活を支える一員に

—社会福祉法人土淵朗親会 特別養護老人ホーム「おでんせ本宮」—

職場ルポ

WORKSHOP REPORT

（文）清原れい子（写真）小山博孝

社会福祉法人土淵朗親会
特別養護老人ホーム「おでんせ本宮」
〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字小板小瀬20-1
TEL　019-656-3011　FAX　019-656-3022

すべて個室。「自分が入るなら」を形に

盛岡駅の西側、旧市街と駅をはさんで反対側の新しく開けたゾーンには、新渡戸稲造、金田一京助などの先人記念館、原敬記念館、岩手県立美術館などが建ち、緑の屋根が目印の盛岡市アイスアリーナもある。その一画、民家や田園が広がり、岩手山を望む開放的な空間に今年四月、特別養護老人ホーム「おでんせ本宮」が誕生した。

「おでんせ」は、岩手の言葉で「いらっしゃい」の意味。介護を必要とするお年寄りの真新しい「住み家」は、暖色系を基調とした温かみのある建物で、すべて個室。全室に洗面台とトイレがあり、使い慣れた家具を持ち込むことができる。

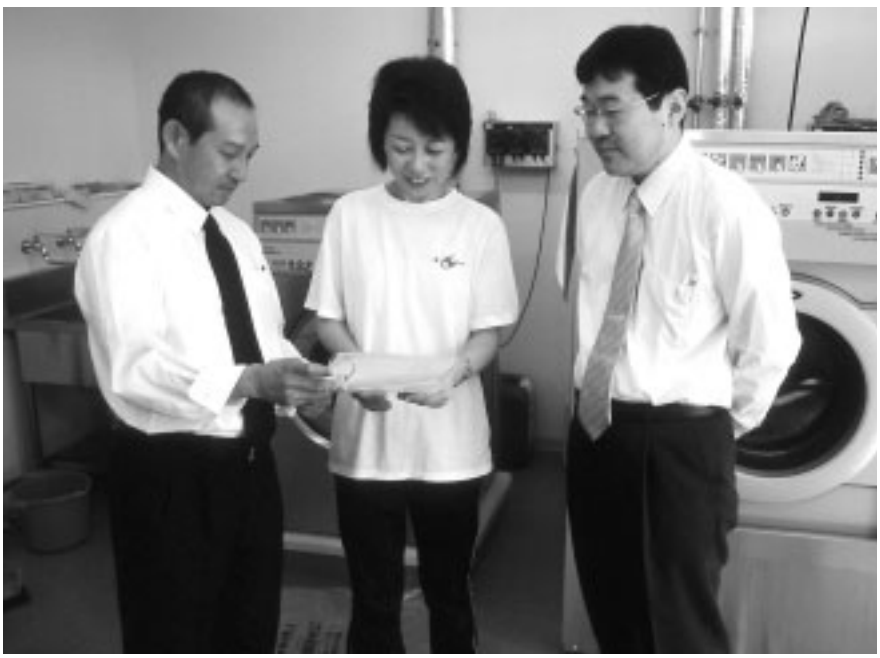
家庭と同じような生活の場と語る高橋陽子施設長

定員はショートステイ用九人を含めて九〇人。九人ずつのユニットが一〇あり、ユニットごとに「さくら通り一丁目」「すずらん通り二丁目」「ひまわり通り三丁目」などの名前がついていて、入居者は「ご近所さん」同士だ。平均年齢八二、三歳。ほとんどが車いすのお年寄りを五九人の職員が支えている。スタッフは若い人たちが多い。

社会福祉法人土淵朗親会は二〇〇二年に、定員五九人のケアハウスおでんせをオープン。その後デイサービスおでんせ、おでんせ介護支援センター、居宅介護支援事業所、ヘルパーステーションや、三つの保育園と地域子育て支援センターを次々に展開してきて、二〇〇六年四月におでんせ本宮をオープンした。

施設長の高橋陽子さんは、社会福祉法人設立以来、常務理事に就いている。

「病気をしたこともあり、世の中のために何か役に立ちたいと考えておりましたが、二〇〇〇年春頃から地域の方々や福祉関係者、お医者さん、会計士さん…



福田さんたちの支援にあたった岩手障害者職業センターの伊藤富士雄障害者職業カウンセラー（写真右）と阿部憲二ジョブコーチ（写真左）

…と、福祉に〝思い〟を寄せ、賛同して下さる方々が集まったのがきっかけです。最初に特養を立ち上げる予定だったのですが、ケアハウスの話が先に進みました。ケアハウスもすべて個室です。特養もすべて個室ですが、自分がいつか入るなら、こうしたい！という思いからです。知らない人たちばかりで間違ってはいけないので、行政や福祉に関係してい

た方からも指導していただきました」

ユニットごとの共同生活室は、入居者たちの食事や団欒のスペース。キッチンや電子レンジがあり、目の前で炊きたてのご飯と温かい味噌汁を盛り付ける。取材中に家族と何人もすれ違ったが、比較的、近所の人たちが多いとか。

「できるだけ自宅での暮らしに近い日常生活を送れるようにと思っています。生活が単調にならないようにボランティアや地域の方々にも協力していただいて、地域交流センターでの諸行事やレクリエーションにより、外部との交流に努めております。ご家族の方には『できるだけきてくださいね』とお話しています」

絵入りのマニュアルで仕事を確認

ここでは、高次脳機能障害と知的障害の人たち二人がリネン室で、視覚障害の人は理学療法士として働いている。高橋さんは、施設がオープンするとき、障害者も採用しようと考えていた。

「できることとできないことはその人によって違います。リネン室で働く二人は、面接をしてこの部署なら働けるかなと思いました。仕事の進み具合は若干違いがありますが、ほかの職員とそれほど変わったという思いはないので、気にすることはありませんね」

福田さんたちが働くリネン室

リネン室の機械の絵入りマニュアルを作成

リネン担当の二人は、洗濯物の回収・配達で介護ヘルパーや入居者と毎日接するため、誤解を生まないように、最初にきちんと話をした。

「障害があることを特徴ととらえて、お互いに支え合ってくださいと話しましたが、慣れてくると誠実な人柄が自然とわかってきて、今ではお互いに声かけをしています。知的障害のある職員とは、よくエレベーターで一緒になるのですが、今日は元気がないな、今日は大丈夫だな、今日は機嫌が悪いなとか、わかります。けっこう話しかけてくれますので、ふつうにあいさつしています」

リネン室の仕事は、ユニットごとにまとめられた入居者の洗濯物を回収し、洗濯して再び各ユニットに戻すこと。新しい施設なので、初めてのことばかり。仕事を教えてくれる先輩がいないため、職場に定着ができるよう、岩手障害者職業

入所者たちの洗濯物を回収し、洗濯、配達と、忙しく働く福田美奈子さん

センターが支援。障害者職業カウンセラーの伊藤富士雄さんが、ジョブコーチの支援計画を立てた。

「高次脳機能障害も知的障害も、情報を視覚的に伝えたほうが理解しやすいので、絵でわかるようにマニュアルを作成しました」

担当のジョブコーチ二人は、最初どちらかが毎日のように顔を出した。担当の一人が阿部憲二さんだ。

「利用者数が少ないところからスタートして、徐々に仕事量が上がってきましたので、仕事を進める上では助かりました。最初、戸惑いはありましたが、混乱することはありませんでした」

ジョブコーチは、会社との間に立ちながら、障害者たちが働きやすいように、汚物除去機、洗濯機、乾燥機などの機械操作方法、仕事上の注意点などのマニュアルを作成していった。

「洗剤などは、用途や使い方を確認してから教材を作りました。ポケットの取り残しに注意しようとか、何をどう気をつけたらいいのか、絵入りの説明書を作って、あいさつの仕方も練習しました。本人たちにわかりやすい教材をつくるのも、大事な仕事だと思っています」

ユニットごとに洗えないものが混じっていないか、ポケットに何か入っていないかなどを調べているが、リネン室でもう一度確認をする。絵入りの説明書は、二人が休みのとき、交代で入る職員にも役立っている。

施設がオープンして半年。落ち着いて仕事ができるようになってきた。

高次脳機能障害に負けず

福田美奈子さんは、二〇〇一年にくも膜下出血で倒れた。失語症や記憶障害が残って、それまでの事務の仕事がうまくこなせなくなり、病院の先生の紹介で障害者職業センターを訪れた。職業評価や再就職に向けてのOA講習などを経て、昨年秋にケアハウスおでんせに就職。デイサービスに通ってくるお年寄りの身の回りの世話をしていたが、今春リネン室に異動した。

「こちらに変わったときは不安がいっぱいでしたが、少ない人数から九〇人に増えてきましたので、ついてこられました。夏は着替えを頻繁にしますから、洗濯が多くて忙しかったのですが、いまは落ち着いています」

福田さんは障害を受けてから、ヘルパー二級の資格を取った。

「どうしてもやりたくて、資格を取りました。講義は半分わからなかったですが、何とか卒業できました。ヘルパーを目指すのには最高の環境だと思っています。がんばって仕事をしていますが、障害を受けてから、すぐ言葉が出てこない

ことがあって……。配達に行くとき、入居のみなさんに声をかけてもらうとすごくうれしいです」

仕事に復帰してまもなく二年。将来はヘルパーの仕事をしてみたい。見守ってきた伊藤さんは「努力家で、とても面倒見がよくて、後輩のことも気にかけてくれています」と言う。

回収・配達が得意です

もう一人は知的障害の青年。小中高と普通校へ通っていたが、高校二年のとき一般就職はむずかしいのではないかと、先生とともに障害者職業センターに相談にきた。そこで、在学中に「職業準備支援」を受け、卒業後は宮城障害者職業能力開発校で職業訓練を受けて、今年三月の卒業と同時に就職した。

「仕事には慣れましたか?」

「はい」

「得意な仕事は?」

「配達とか回収です」

配達・回収のときに使う台車の押し方は、阿部さんが指導した。

「廊下を曲がるときは、角にぶつけないように、曲がるときはスピードを落としてゆっくりと、実際に練習しました」

あいさつの仕方も、阿部さんと練習して、身につけた。

「ユニットに入るとき、回収のときは『洗濯物を取りにきました』。出るときは『失礼します』。配達するときは『洗濯物を持ってきました』と言います。ここで働く自信があります。ただし、慣れすぎると困るから、初心忘れるべからずです」

最近、仕事に慣れてちょっと気が緩み、初心を忘れないようにと教えを受けたのだという。この心意気で、これからも働き続けて欲しい。

「ご苦労様、ありがとうと声をかけてもらえると、うれしいと思います。リネン室の中だけですと、職場の人たちとの接触がないので、配送と回収は他の人と接触する意味でも重要ですね」と阿部さん。二人は臨時職員として働き、社保は完備している。

「見守り役」は、生活相談員で看護師の斎藤啓子さんだ。

生活相談員・看護師の斎藤啓子さん

「がんばっていることを理解してもらわないといけませんので、最初は手違いがあってもユニットのほうでカバーして下さいと話しました。日誌のやり取りをしていますが、こちらから指示しなくても、自分たちの流れで仕事をしていると思います。初心に返ってねと、ときどき言うくらいで、一生懸命がんばってくれていると思います」

専門を生かして、機能訓練

一階の「地域交流センター」では、入居者と家族、地域の人たちとの夏祭りや敬老会などが開かれるが、行事のないときはリハビリ室になる。明内(みうない)康彦さんは、県内の一般病院で一四年間、理学療法士として勤務してきた。現在の視力は目の前の人の輪郭がわかるぐらい。電車とバスで通勤している。

「視力の低下が進んで、理学療法士の資格だけで職業生活を維持していくのはむずかしいと考えて、三療の資格を取りたいと考えました」

病院を退職して盲学校専攻科に通い、鍼・灸・マッサージ師の資格を取り、同

時に音声ソフトや画面拡大ソフトを使用してパソコンで事務処理ができるようにと、障害者職業センターでOA講習を受けた。

「毎日通うのはたいへんでしたが、OAコースで学んだことは役立っています。再就職については、大病院は病院内が広く、職員も患者さんも大勢で、視覚障害があると動きや対応がたいへんですので、卒業後は規模の小さな病院か介護施設に就職したいと思いました」

進路指導の先生が、集団面接会でここの理事長と話す機会があり、ぜひにと就職が決まった。

「これまでリハビリの仕事をしてきましたので、お年寄りと接することに抵抗はありませんでした。まだまだ手探りですが、地域の生活の場で接するのは、病院と違って新鮮なことがありますね。特養に勤めている理学療法士はまだ少ないので、これからの領域だと思います」

機能訓練の担当は一日約一五人。おじいさんのリハビリを、おばあさんが励ましていた。

「少しでも機能が低下しないようにと考えていますが、身体機能の訓練をするだけがリハビリではないと思います。ストレートに訓練をしますと言っても、乗ってこない方もいますから、『今日は天気がいいですね』とか一般の話でコミュニケーションを図りながら、『今度がんばってみましょう』と声かけをしています。」

ユニットの共有スペースでは、個別のリハビリとともに、火金、水土とに分けてみんなでラジオ体操も行っている。

「ラジオ体操の後、歌を歌っています。いまは赤とんぼ、次は里の秋でしょうか。季節に合わせて変えています。個別のリハビリに乗ってこない方でも、みんなでやる体操や歌を楽しみにしている方もおります」

施設長の高橋さんは、障害者の職種のレベルアップも視野に入れている。

「できるところで仕事をするなら、みんな同じです。法人の中に部署はいっぱいありますので、本人の希望を少しずつ入れながらやってみたいと思います。施設としては、家族、地域の協力を得ながらいい方向に持っていければと思います。個人で介護をするには限界がありますから、施設は必要だと思います。入られた方に、家の連続だと思っていただければうれしいですね」

お年寄りの生活の場を、三人も一職員として支えている。

コミュニケーションをとりながらリハビリをすすめる明内さん

機能訓練を担当する明内康彦さん